

写真で振り返る

# 今昔物語

その69

## 阪松原地区の風景

昭和34年



昭和34年



現在

今回は、昭和34年に撮影された阪松原地区の写真をご紹介します。

現在の写真と比較すると、田んぼが棚田のように段々に広がっていることがわかります。また、写真では分かりづらいですが、当時の家屋は瓦屋根ではなく茅葺き<sup>かやぶ</sup>屋根で、ススキやチガヤなどの草を乾燥させたものを材料にして屋根が作られていたそうです。

地域の方にお話を伺うと、昭和30〜40年代ごろは青年団の活動が地域の娯楽の中心でした。現在の阪松原生活改善センター付近では、夏には盆踊り、冬には芝居などが行われ、こうした行事が地域の楽しみとなっていたそうです。また、道路は現在の県道35号紀宝川瀬線のように舗装された道ではなく幅の狭い土の道で、移動はほとんど徒歩だったそうです。写真や地域の方のお話から、当時の暮らしや地域のにぎわいの様子がかがえました。こうした歴史や地域のつながりが、今も大切に受け継がれています。

## つやみらい

### 広報紙と生成AI

最近、「生成AI」という言葉を耳にする機会が増えました。文章を作成したり、イラストを描いたり、質問に答えたりと、これまで人が時間をかけて行ってきたことを、AIが短時間で行うことができるようになり、ニュースやインターネットでもよく話題になっています。

自分も、広報の文章作成や校正作業などに活用していますが、「便利だ」と感じる一方で、「広報担当の仕事もAIに任せられる時代が来るのでは…」と、少し心配になることもあります。これまで時間をかけて考えていた文章の言い回しや、表現の工夫なども、AIに相談するとあっという間にいくつも案が出てくるので、「こんなに早くできるのか」と驚かされることもあります。

これからの時代は、こうした新しい技術を上手に取り入れながら、より分かりやすい情報発信につなげていくことも大切なのだと感じています。

一方で、整った文章ではあるものの、最終的に誤りがないかを確認するのは人の役割です。内容や表現が適切かどうかを確かめ、正しく伝えるためには、やはり人の目でしっかりと確認することが大切だと感じました。

便利な技術は活用しつつも、最後は自分の目で見ても、感じたことを自分の言葉で伝える。これからも、その姿勢を忘れずに広報紙づくりに取り組んでいきたいと思えます。

もし将来、「このひとりごと」もすべてAIが書いているのでは？」と思われる日が来たら、そのときはこそそり教えてください。少なくとも、今のところは、まだ自分が考えて書いています。

(実はこの文章も半分はAIに?) 田中 健太郎



広報担当  
田中 健太郎

